

## 『スペードの女王』の老伯爵夫人の モデルをめぐって

笠 間 啓 治

1. 問題提起<sup>(1)</sup>。プーシキンの小説『スペードの女王』の老伯爵夫人<sup>(2)</sup>のモデルとしては、ナターリヤ・ペトロヴナ・ゴリーツィナ公爵夫人<sup>(3)</sup>が最も有力で<sup>(4)</sup>、いわば定説に近くなっている。プーシキン自身その日記の中で半ば認めている<sup>(5)</sup>。確かに小説の老伯爵夫人の行動・性格のデテールにはゴリーツィナ公爵夫人を思わせるものが少なくない。だがプーシキンがこの女性に対して直接観察する機会があったかどうかについては甚だ疑問である。当時の宮廷に極めて近い大貴族の家柄に加えて、五代の皇帝に仕え、上流社会に隠然たる勢力を有していたゴリーツィナ公爵夫人と直接面談するには、プーシキンは余りに小さな貧乏貴族であったし、彼女の前に伺候できる縁戚関係もなかった<sup>(6)</sup>。にもかかわらず小説発表<sup>(7)</sup>と同時に人々が『スペードの女王』の老伯爵夫人の形象の中にゴリーツィナ公爵夫人をみとめたのは、当時高名のこの女性の私生活をめぐる人々の噂に基づいてプーシキンが老伯爵夫人を造型したために他ならぬと考えられる。即ち、作者の直接観察による独創的な性格分析ではなくて、ゴリーツィナ公爵夫人のユニークな生活態度をめぐり当時ひろく流布していた風聞が老伯爵夫人の行動・性格の基になっていたと思われるのである。従ってゴリーツィナ公爵夫人モデル説を認めたとしても、このことは必ずしも他のモデルの存在を否定するものではない。本論文にてエカテリーナ・ヴラジーミロヴナ・アブラクシナ夫人<sup>(8)</sup>をモデルとして提唱するのは、一つの作業仮説としてであって、この現実的人物をモデルと考えれば、従来のゴリーツィナ公爵夫人説では解釈できない諸デテールにも合理的な説明が可能となってくると思われるからである。

2. 小説の老伯爵夫人は80才の老女<sup>(9)</sup>ということになっているが、それにしては余りにもかくしゃくとしている。雪の舞う厳冬でも夜毎馬車を走らせ、夜会に出かけている。小説の場面は1828-1831年頃と設定されているが<sup>(10)</sup>、現実のゴリーツィナ公爵夫人はこの時既に90才に近く<sup>(11)</sup>、前々から自宅にひきこもっ

たままに出仕することもなく、人前にほとんど姿を現わさなかったと伝えられる<sup>14)</sup>。厚化粧で夜会に出かける小説の老伯爵夫人の面影からは程遠いと言わねばならない。この点ではむしろアブラクシナ夫人がモデルと考えた方が説明はつくのであって、当時夫人は60才前後で<sup>15)</sup>、史上有名なアブラクシナ家の夜会の女主人として社交界で余りにも華やかな存在であった。結婚後のプーシキン夫妻はこの夜会に出席し、夫人の姿を直接見たものと考えられる。

3. 作中の老伯爵夫人の年齢(80才)については矛盾した面がいくつかある。例えば、葬儀の際に彼女の遺体を見て気絶したゲルマンに対し、彼は老伯爵夫人の隠し子だとのささやきが起きている<sup>16)</sup>。おそらく20才代のゲルマンが老伯爵夫人の隠し子だとする噂に人々が納得したとすれば、老夫人はどうしても60才代でなければならぬことになる。プーシキンは老伯爵夫人を造型するに当たって、小説の叙述よりももっと低い年齢の女性をモデルに考えていたのではないかとの推測が可能ゆえんである。少なくとも当時90才近いゴリーツィナ公爵夫人に限定する訳にはいかない。もし当時60才ばかりのアブラクシナ夫人もまたモデルになっていたと仮定すれば、上の年齢についての矛盾に合理的な説明を行なうことができる。

4. 小説の老伯爵夫人は若い頃にパリの社交界で人々の注目の的となり、「モスクワのヴィーナス」<sup>17)</sup>なる異名をとった美女であったとなっている。ゴリーツィナ公爵夫人は幼い頃からヨーロッパで育ち、結婚後もルイ王朝の社交界に出ていて、この点では小説の記述に合致する経歴であるけれども、その頃に「モスクワのヴィーナス」に類する仇名を持っていたとの記録もないし、美貌の評判もなかった。今日知られる肖像画から判断して美女からは遠かったと思われる<sup>18)</sup>。おそらく不美人だったとの評価もある<sup>19)</sup>。老年になって口髭を濃く生やしていたために「ひげ夫人」<sup>20)</sup>の仇名が陰口のようにささやかれていた。これとは反対に、アブラクシナ夫人の方は若い頃から美女の評判が高く<sup>21)</sup>、母に伴なわれて革命前夜のフランス社交界にデビューして、その表情ゆえに「怒れるヴィーナス」<sup>22)</sup>と呼ばれていたという。小説の「モスクワのヴィーナス」なる表現はこの仇名をヒントにしてプーシキンが創出したとの推定もある<sup>23)</sup>。少なくともこの仇名によって老伯爵夫人の若き日の美貌を作者は強調せんとしていることは確かであるから、この点に限ってはアブラクシナ夫人の方がモデルとして有力だと言わねばならない。小説の中に次の叙述がある。ゲルマンが老伯爵夫人の寝室へ忍び込んでみると、「パリのルブラン夫人の筆になる肖像画が二枚、壁にかかっていた。一枚は年のころ四十ばかりのあから顔の肥大漢を

あらわし、その淡緑の軍服の胸には勲章が輝いている。もう一枚は年若な鉤鼻の美女で、打ち粉した髪を額際深くなであげ、薔薇の花をさしている」<sup>24</sup>（神西清訳）。つまりアブラクシナ夫人の夫ステパン・ステパノヴィチ・アブラクシン<sup>24</sup>の肖像画と、若き日の彼女自身の肖像画である<sup>24</sup>。夫妻の結婚は1793年<sup>24</sup>、夫は40才ほどであったことを指摘しておきたい。

5. アブラクシナ夫人には一男二女があり<sup>24</sup>、長女ナターリヤ・ステパノヴナは1821年にセルゲイ・セルゲーエヴィチ・ゴリーツィン公爵に嫁した<sup>24</sup>。プーシキンはこの夫妻と親交があり、たびたび彼女を訪ねている<sup>24</sup>。プーシキンにとってナターリヤ・ステパノヴナは忘れられぬ名前であったとの推測もある<sup>24</sup>。プーシキンがこの人の口を通じてアブラクシナ夫人の性格や私生活の一端に触れたとしても不思議ではない。プーシキンは『スペードの女王』執筆の少し前に小説『小さな広場の片隅にて』を構想している<sup>24</sup>。結局これは未完に終わったが、この中でナターリヤ・ステパノヴナとその父親ステパン・ステパノヴィチ・アブラクシンを登場させている<sup>24</sup>。全くの想像だか、あの有名なアブラクシン家の夜会を描く予定になっていたのではないか。そしてこの夜会の女主人アブラクシナ夫人も登場することになっていたのではないだろうか。少なくともアブラクシナ夫人はプーシキンの視野の中に存在し、創作のモデルとなりうる可能性だけは持っていたと行うことができよう。

6. やはり『スペードの女王』執筆の少し前プーシキンは未完の小説『書簡体のロマン』<sup>24</sup>を書き始め、その中で養女の問題を扱っている。ここで提起された養女のテーマは『スペードの女王』の養女リザヴェータ・イワノヴナの形象につながってくることは、従来から指摘されている所である<sup>24</sup>。だが、プーシキンが何故に養女の問題を提起し、明らかにヒューマンな同情的な姿勢を示したのであろうか。この点の考察は従来ほとんどなされなかったが、この時期のプーシキンの伝記の中に、アブラクシナ夫人に育てられた三人の養女が現われてくる事実を指摘しておかねばならない。即ち、ソフィヤ・フォードロヴナ・プーシキナ、アンナ・カルロヴナ・ウスチーノワ夫人、マリヤ・ドミトリエヴナ・ウフトムスカヤ夫人であって、これらの女性は濃淡の違いはあるがプーシキンと親しく、しかも養女という立場からお互い結婚後も交通などがあったと考えられる。つまり、養女の形象の創出に当っては現実的なモデルが存在していた。

7. これらの女性の中でソフィヤ・フォードロヴナ・プーシキナは詩人にとって大きな意味を持つ女性であった。彼女は両親と死別後姉アンナ・フォードロ

ヴナと一緒にアブラクシナ夫人に引き取られ、養女として夫人の手元で育てられた<sup>84</sup>。1823年に姉アンナ・フォードロヴナがワシーリー・ペトロヴィチ・ズプロフと結婚したのに伴ない、妹ソフィヤ・フォードロヴナもアブラクシナ家を出て、姉の嫁ぎ先ズプロフ家に同居していた。追放解除後のプーシキンがワシーリー・ズプロフと友人になり、その邸を頻りに訪問している中にソフィヤ・フォードロヴナに恋をし、求婚した。これが、プーシキンの真剣に結婚を考えた最初の人であったとされている（更に姉のアンナ・フォードロヴナにも恋していたとの推測もある<sup>85</sup>）。ズプロフ家を訪れてこの姉妹と親しく話し込んだ際、当然彼女らの不幸な過去、養い親だった人のことなどが話題になったと思われる。未完の小説『書簡体のロマン』執筆の僅か前の出来事であるから、この中で養女の問題を論じている部分は、ソフィヤ・フォードロヴナとのかかわりの上で考えなければならないであろう。プーシキンは養女という立場の心理的屈辱を生まのまま示しているが、それは全くの空想の産物ではなく、詩人とソフィヤ・フォードロヴナとの談話の中で生まれた彼女への同情が言わせたものと考えられる。ひょっとすると、ソフィヤ・フォードロヴナから直接聞いた告白をそのまま小説の中へくり入れたのかもしれない<sup>86</sup>。そして、プーシキンはソフィヤ・フォードロヴナ（および姉アンナ・フォードロヴナ）の身の上に思いを致す時、彼女らの養い親たるアブラクシナ夫人の存在は無視できなかった筈であるにもかかわらず、この未完の小説では養い親の形象化には至っていない。というよりアブラクシナ夫人の存在をフィクション化できなかったことが、『書簡体のロマン』の未完の理由ではなかつただろうか。その作業は『スペードの女王』に移行されたと解釈できるだろう。

8. 養女の問題は全く同じトーンで『スペードの女王』の中で反復されると共に、更に一步進めて養女と養い親との対立という形でフィクション化が行なわれている。老伯爵夫人の性格の提示が養女リザヴェータ・イワノヴナとの対置という形でなされていることを指摘しなければならない。言い換えれば、アブラクシナ夫人という具体的な人物を取り上げて小説のメイン・テーマに結びつけようとしたが故に、養女の形象化の試みが前と同じ形で再びここに復活してきたと解釈することができる。

9. アブラクシナ夫人の養女の中でもう一人、アンナ・カルロヴナ（旧姓シチッツ）<sup>87</sup> という女性とプーシキンは知己であった。この女性はアドリアン・ミハイロヴィチ・ウスチーノフ<sup>88</sup>と結婚し、モスクワのヴォズドヴィジェンカ（現カリーニン通り №5）に住んだ<sup>89</sup>。両親がペテルブルグのウスチーノフの持家

の一つに住んでいたこともあって、プーシキンはこの夫妻と親交があり、1831年2月、モスクワに住むことになった時、自分のアドレスをウスチーノフ家に書き残してきている。親交の程度については詳細は不明だが、四囲の状況から推察して夫人とも会い、親しく話したこともあったと考えられる。同じ養女同士ということもあってソフィヤ・フォードロヴナ・プーシキナとこのウスチーノフ夫人との間にはかねてから文通がなされていたとされているから、彼女たちの共通の養い親たるアブラクシナ夫人の噂も出てきたと考えるのが自然であろう。更に、『スペードの女王』の中で老伯爵夫人とリザヴェータ・イワノヴナとの心理的な葛藤が抑制した筆で客観的に述べられている点に注目すれば、既に結婚して養い親から離れて生活しているウスチーノフ夫人が大きく浮かび上がってくる。彼女はかつての養い親に対し心理的な冷静さを保ちつつ回顧できるだけの年齢・環境にあった。『スペードの女王』の老伯爵夫人と同じくアブラクシナ夫人も、基本的には善良な性質の人であっただろうが、人生の挫折も知らず、実生活の苦勞とも無縁に育った女性の常として、他人に対しては気まぐれで、エゴイストチックな態度をとっていたであろう。ましてや養女の目から見た時、しばしば無意識的な暴君に変貌したであろう。養女であったウスチーノフ夫人としては、養い親に感謝し、恩義を感じていたが、同時に心理的な反撥を今も抱きつづけていたであろう。プーシキンはウスチーノフ夫人の社交的な修辭でかざられた話の裏にそのような心理の屈折を読み取ったのではないだろうか。

10. その他に、アブラクシナ夫人は遠縁のマリヤ・ドミトリエヴナ・ゴリーツィナ<sup>40)</sup>という名の孤児を引き取って育て、後にアレクサンドル・イワノヴィチ・ウフトムスキー公爵<sup>41)</sup>に嫁がせている。プーシキンはこの人物と親交を結んでいたことが知られており<sup>42)</sup>、当然その夫人の口からアブラクシナ夫人のことを聞かされたと思われるが、詳細は分かっていない。なお、小説の作中人物のトムスキーなる姓はこのウフトムスキーをヒントに作ったプーシキンの遊びと考えられる。ロシア貴族にトムスキーという姓は存在せず、当時の人ならウフトムスキーを直ぐ連想したと思われる。もしそうならプーシキンの作中人物（老伯爵夫人の孫ということになっている）の姓をもてあそぶことによって、具体的な人物（アブラクシナ夫人）を暗示しようとしたのではあるまいか<sup>43)</sup>。

11. 結論。老伯爵夫人のモデルがゴリーツィナ公爵夫人だとする従来の通説を否定するものではない。事実、小説の中の数多くのデテールがこのモデルの日常の生活態度と合致している。また、ザグリヤスカヤ夫人説についてもここ

で斥けている訳ではない<sup>44</sup>。しかし、プーシキンが小説『スペードの女王』を創作するに当って上のモデルの他に更にもう一人アブラクシナ夫人を念頭に置いていたと考える。つまり、小説の老伯爵夫人は単一のモデルからの写真ではなかった。当時の人々の話題を集めていたゴリーツィナ公爵夫人についての噂を基に大枠の輪廓を作り、同時にアブラクシナ夫人を造型の素材として用い、プーシキンの感情生活につながる女性を対置させることによってアブラクシナ夫人をフィクション化させていったと考える。そういったフィクション化が余りにも見事になされ、老伯爵夫人の形象がそれ自体として存在感を確立してしまっただけで、アブラクシナ夫人の具体的デテールが小説の中に埋没して隠れてしまって、当時の人々も後世の読者もそれと気付かずに終わったと解することができる。従来のプーシキン研究でアブラクシナ夫人の名がほとんど登場してこなかったゆえんである。

- 註(1) 本論文ではプーシキンからの引用は А. С. Пушкин. Полное собрание сочинений в 17-и томах. Изд. АН СССР, М.-Л., 1937-1959 により、その巻数とページ数のみを示すこととする。
- (2) графиня Анна Федотовна (А. С. Пушкин, т. 8, с. 227).
- (3) княгиня Наталья Петровна Голицына (旧姓 Чернышёв) (1741-1837). この人の経歴については既に数多くの言及がなされているし、本論文とは直接関連しないので、繰返さない。
- (4) Н. П. Голицына 公爵夫人に言及する人は『スペードの女王』のモデルとして扱う場合がほとんどだが、異論がない訳ではない。本論文では Н. П. Голицына 公爵夫人モデル説を否定するものではなく、この女性に加えて更に別のモデルが存在しうるとの立場に立っている。Н. П. Голицына 公爵夫人モデル説の検討は別の機会を待ちたい。
- (5) 『スペードの女王』発表直後の1834年4月7日付の日記の中でプーシキンは「私のスペードの女王は大いにもてはやされている。賭博打ちたちは3・7・1にかけている。宮中の人たちは老伯爵夫人と Н. П. 公爵夫人とが似ているとしているが、別に問題にはなっていないようだ」と書いている(А. С. Пушкин, т. 12, с. 324)。ここで Н. П. 公爵夫人とあるのは Н. П. Голицына 公爵夫人で、このことを上のモデル説の有力な根拠として扱うのがプーシキン研究の大勢だが、本論文ではむしろプーシキンが予想通りの反響を得て、自己の真意が豁然できたことへの安堵感を見てとりたい。
- (6) Н. К. Телетова. Забытые родственные связи А. С. Пушкина. Л., 1981 によれば、家系図の上で Н. П. Голицына 公爵夫人の実家 Чернышёвы 家と Пушкины 家とは、Ржевские 家を介して非常に遠いけれども、つながっている。
- (7) 『スペードの女王』の発表は1834年(А. С. Пушкин, т. 8, с. 1054)。

- (8) Екатерина Владимировна Апраксина (旧姓 Голицына)
- (9) осьмидесятилетняя старуха (А. С. Пушкин, т. 8, с. 228).
- (10) 『スペードの女王』の執筆は1833年10—11月と推定されているが(А. С. Пушкин, т. 8, с. 1054), 原稿の一つに「4年前のこと」という書き出しのものがああり、それが「2年前」とも「5年前」とも「3年前」ともなっている (А. С. Пушкин, т. 8, с. 834)。このことから判断してプーшкиンはこの小説の出来事を 1828—1831 年と設定していたものと思われる。
- (11) Н. П. Голицына 公爵夫人は1741年生まれであるから小説の場面の頃には少なくとも87才以上ということになる。
- (12) А. О. Смирнова-Россет. Автобиография. (Неизданные материалы). М., 1931, с. 186.
- (13) Е. В. Апраксина 夫人の生年については諸説あるが, Н. Н. Голицын. Род князей Голицыных. т. I, Спб., 1892, с. 178 に従えば, 1770年生まれで, 小説の場面の頃には58才ないし61才ということになる。
- (14) А. С. Пушкин, т. 8, с. 247.
- (15) *la Vénus moscovite* (А. С. Пушкин, т. 8, с. 228).
- (16) Портретная миниатюра. Из собрания Государственного Русского музея. I. XVIII-начало XIX века. Л., 1974, с. 71 に1770年代の Н. П. Голицына 公爵夫人と思われる女性の肖像画が再録されているが, おおよそ30才で新婚間もない彼女だが美女というには余りかけ離れている。なお, Московская изобразительная пушкиниана. Вып. I. М., 1975, с. 81 にモスクワのプーшкиン博物館所蔵の彼女の晩年の肖像画が収められているが, それによっても同様に言うことができる。
- (17) А. Трубников. Княгиня Голицына в Марьине и Городне. — «Старые годы», 1910, июль-сентябрь, с. 170; Дневник Пушкина 1833—1835. Под ред. и с объяс. примечаниями Б. Л. Модзалевского. М.-Пг., 1923, с. 132.
- (18) *Princesse moustache*. この異名は名高く, Н. Н. Голицын. Род князей Голицыных. т. I. Спб., 1892, с. 178 にも記載されている程である。彼女のこと触れた多くの証言が, 半ば嘲笑的なこの異名を引いている。この他にも *Moustachine* とか *fée Moustachine* との表現もとったという (Л. В. Крестова. «Она одна бы разумела.....». — «Прометей», 10, 1974, с. 171)。
- (19) Д. Благово. Рассказы бабушки. Из воспоминаний пяти поколений, записанные и собранные ее внуком. Спб., 1885, с. 114.
- (20) *Vénus en sougroux* (Д. Благово. Рассказы бабушки. Спб., 1885, с. 114).
- (21) Н. О. Лернер. Рассказы о Пушкине. Л., 1929, с. 149.
- (22) А. С. Пушкин, т. 8, с. 239—240.
- (23) Степан Степанович Апраксин. この人の没年 (1827年) については記録は一致しているが, 生年に対しては様々である。Опыт исторического родословия Апраксиных. Спб., 1841, с. 12—13 は1756年生まれとし, Д. Благово. Рассказы

- бабушки. СПб., 1885, с. 112 は1757年または1758年生まれとしている。
- ②4 Р. Белоусов. Из родословной героев книг. М., 1974, с. 237-238; Ю. Раков. «Дом Пиковой дамы». — «Белые ночи. Очерки, зарисовки, документы, воспоминания». Л., 1971, с. 162-163.
- ②5 Н. Н. Голицын. Род князей Голицыных. т. I. СПб., 1892, с. 178.
- ②6 Русский биографический словарь. т. II. СПб., 1900, с. 241.
- ②7 Наталья Степановна Голицына (旧姓 Апраксина) (1794-1890) は1821年に Сергей Сергеевич Голицын 公爵 (1783-1833) と結婚した (Н. Н. Голицын. Род князей Голицыных. т. I. СПб., 1892, с. 181; Е. Серчевский. Записки о роде князей Голицыных. СПб., 1853, с. 147).
- ②8 И. А. Шляпин. Граф А. А. Аракчеев. — «Русская старина», 1900, январь, с. 103.
- ②9 Л. В. Крестова. «Она одна бы разумела.....». — «Прометей», 10, 1974, с. 173.
- ③0 «На углу маленькой площади.....» の構想がねられていったのは, 1829年11-12月にはじまり1832年に及ぶと推定されている (А. С. Пушкин, т. 8, с. 1053).
- ③1 Л. В. Крестова. «Она одна бы разумела.....». — «Прометей», 10, 1974, с. 173-174.
- ③2 «Роман в письмах» の執筆は1829年末と推定されている (А. С. Пушкин, т. 8, с. 1051).
- ③3 А. С. Пушкин. Полное собрание сочинений в шести томах. Под ред. М. А. Цявловского. Т. 4. Изд. «ACADEMIA», М.-Л., 1936, с. 740.
- ③4 Анна Федоровна Зубкова (旧姓 Пушкина) (1803-1889), Софья Федоровна Панина (旧姓 Пушкина) (1806-1862) の姉妹については Д. Благово. Рассказы бабушки. СПб., 1885, 460-461; Б. Л. Модзалевский. Василий Петрович Зубков и его Записки. — «Пушкин и его современники». Вып. IV, 1906, с. 104-107 に依る。
- ③5 Б. Л. Модзалевский. Пушкин. Л., 1929, с. 339.
- ③6 『スベードの女王』の養女 Лизавета Ивановна のモデルについての考察は, 従来のプーшкиン研究では全くなされていない。ここでは本論文の主旨に関連する範囲でのみ具体的な指摘を行なったのであって, モデルの名を特定化する意図はない。
- ③7 Анна Карловна Устинова (旧姓 Шитц) (Д. Благово. Рассказы бабушки. СПб., 1885, с. 461). なお, Л. А. Черейский. Пушкин и его окружение. Л., 1975, с. 504 はこの女性の旧姓を Шитц としている。
- ③8 Адриан Михайлович Устинов とプーшкиンとの交際については, К. Шилов. Московский адрес. — «Прометей», 10, 1974, с. 85-99 による。
- ③9 В. Соколов. Указатель жилищ и зданий в Москве, или адресная книга. М., 1826, с. 14.
- ④0 Марья Дмитриевна Ухтомская (旧姓 Голицына). (Д. Благово. Рассказы



бабушки. СПб., 1885, с. 461; Б. Л. Модзалевский. Василий Петрович Зубков и его Записки. — «Пушкин и его современники», IV, 1906, с. 103).

- (41) Александр Иванович Ухтомский 公爵
- (42) Л. А. Черейский. Пушкин и его окружение. Л., 1975, с. 434.
- (43) М. Д. Ухтомская 夫人の姉 Вера Дмитриевна (1807–1850) もまた Е. В. Апраксина 夫人に育てられ, 1829年に Н. Я. Голицын 公爵に嫁いだ(Д. Благово. Рассказы бабушки. СПб., 1885, с. 461; Т. П. Пассек. Из дальних лет. Воспоминания. Т. II. М., 1963, с. 748). プーシキンがこの夫妻と知己であったかどうかは不明である。
- (44) П. В. Нащокин がプーシキンに向って, 「伯爵夫人は Н. П. Голицына 公爵夫人には似ていない。むしろ別の老夫人, Наталья Кириловна Загряжская (旧姓 Разумовская) (1747–1837) との類似点が多い」と指摘すると, プーシキンはこの指摘に同意して, 「性格や習慣の複雑な Н. К. Загряжская 夫人を描くよりも, Н. П. Голицына 公爵夫人を描く方がやさしかった」と答えた: —という話を П. И. Бартенев は伝えている (Рассказы о Пушкине, записанные со слов его друзей П. И. Бартеневым в 1851–1860 годах. Л., 1925, с. 47)。Л. Майков. Пушкин. Биографические материалы и историко-литературные очерки. СПб., 1899, с. 412 も Н. К. Загряжская 夫人モデル説を唱えている。本論文の Е. В. Апраксина 夫人モデル説はこの考えを排斥するものではなく, 現在ひろく流布している Н. П. Голицына 公爵夫人モデル説と共に並立しうるものとする。ただ, Н. К. Загряжская 夫人は妹の子 Мария Васильевна Кочубей (旧姓 Васильчикова) (1779–1844) を育て, 嫁ぎ先の Кочубей 家に同居していた(Л. Майков. Пушкин. СПб., 1899, с. 397–413; Русский биографический словарь. Жабокритский—Заловский. М.— СПб., 1916, с. 159–161)。しかしこの話は『スベードの女王』の老伯爵夫人と養女 Лизавета Ивановна との関係にはなじまないと考えられる。

Е. В. Апраксина—прототип старой графини в “Пиковой даме” А. С. Пушкина

Кэйджи КАСАМА

Многие пушкинисты считают прототипом старой графини только Наталью Петровну Голицыну (урожд. Чернышеву) (1741–1837). Автор этой статьи не отрицает этого всеобщего мнения, но утверждает, что можно найти воплощение черт еще одной женщины, —Екатерины Владимировны Апраксиной(урожд. Голицыной) (1770–1850). А. С. Пушкин был знаком с семьей Апраксиных и, может быть, не раз видел портрет, изображавший Е. В. Апраксину в молодом

сти. Известно, что она была красавицей и в светских кругах ее называли "Vénus en courroux". В конце 1820-х годов Пушкин писал роман "На углу маленькой площади", где намерен был изобразить всех членов семьи Апраксиных.

В то же время в незаконченном "Романе в письмах" Пушкин поднял вопрос о воспитаннице. Можно предположить, что в "Пиковой даме" Лизавета Ивановна является дальнейшим развитием воспитанницы "Романа в письмах". В "Пиковой даме" образ старой графини сопровождает перерождение другой героини — ее воспитанницы. В действительности Екатерина Владимировна воспитывала несколько девушек. Из них Пушкина хорошо знали четыре женщины: Анна и Софья Федоровны Пушкинны, Анна Карловна Устинова (урожд. Щитц), Мария Дмитриевна Ухтомская (урожд. Голицына).